Japanese association of educational psychology

PA 14

個人道徳の発達に関する研究（1）

― 日中大学生の比較 ―

○二宮　克美　・　首藤　敏元
（愛知学院大学情報社会政策学部）　（埼玉大学教育学部）

【問題および目的】　近年、向社会的行動や自己管理(prudence)に代表されるような、個人の自由と道徳的要素の両方が含まれる場面での判断と意思決定は、個人道徳(person-moral)の問題として研究されるようになった。本研究は、この個人道徳場面において道徳的義務感と自己決定権意識をどのように発達させているのかを明らかにする目的で計画された。その出発点として、日本と中国の青年の個人道徳の比較検討を行った。本報告(1)では、道徳、慣習、自己管理、趣味、友達、外見の6領域での善悪判断ならびに親権威判断、親の行動の善悪判断についての主要な結果を述べる。

【方法】＜被調査者＞　東京近郊の大学生 248名（男子 102名、女子 146名；平均年齢20.6歳）ならびに南京市内の大学生 188名（男子62名、女子126名；平均年齢19.8歳）。

＜調査時期＞　2000年10月～11月。

＜調査項目＞　道徳（親の財布から黙ってお金をとる等の3項目）、慣習（食事のとき、ひじを食卓にのせて食べる等の3項目）、自己管理（やせようと思い、1日に1回しか食事をとらない等の3項目）、趣味（恋愛小説に夢中になる等の3項目）、友達（遊び人を友達にもつ等の3項目）、外見（男子が耳にピアスをする等の3項目）に対して、「絶対にしてはいけないか」、「本人の好きなように（自由に）してよいか」、「時と場合によるか」の3件法で聞いた。さらに、親がやめてほしいと思い注意しても、青年がやめたくないとき、「親の考えに反対であっても、親の意見に従った方がよい」のか「親が反対しても、自分の考えを通してもよい」のかをたずねた。

また、「子どもの電話を盗み聞きする」、「子どもの日記を読む」など10項目の行動について、子どもの許諾なしに行われた場合、「親でも許されない」、「親の好きなようにしてよい」、「時と場合による」の3件法で聞いた。さらに、子どもが反対しても、親が必要と感じたならば、してもよい（許される）か否かを聞いた。

【結果および考察】1．領域別の悪さ判断：6つの領域ごとの悪さ判断を図1（男子）に示した。国別×性別の分散分析の結果、国別に主効果が見られ（すべての領域で$p<.01$）、性別では趣味の領域でのみ認められた（$p<.05$）。日本も中国も最も悪いと判断されているのは道徳であり、続いて慣習である。国による違いは道徳を除いて、いずれも中国の大学生の方が悪いと判断している。

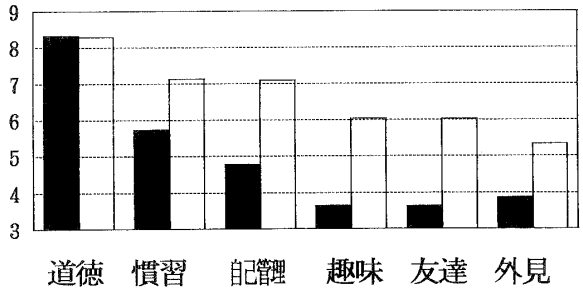

図1．領域別の悪さ評定（■日本、□中国）

2．親権威の受容：6領域ごとの親権威受容得点を図2（女子）に示した。分散分析の結果、慣習領域で男女差、国別の差は認められなかった。道徳や慣習では親の権威を受容する傾向の高いことがわかるが、それは日本においてである。それ以外の領域では、中国の方が親権威を認めている。

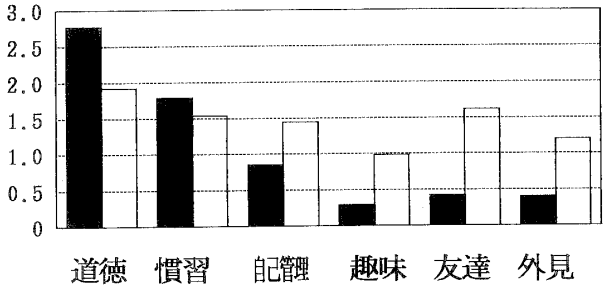

図2．親権威受容得点（■日本、□中国）

3．親の行動の善悪判断：「電話の盗み聞き」、「子どもの日記を読む」、「届いた手紙を隠す」などの項目は、親でもダメが8割を超えていた。「おこづかいを減らす」や「子どもの門限を決める」、「家事分担を決める」などの項目は、時と場合によるが半数を超えていた。

4．親権威判断：親の行動の善悪判断とほぼ対応しており、「電話の盜み聞き」、「子どもの日記を読む」などの6項目では、親権威を認めていなかった。

〈付記：科研費・基盤研究(B)(2) 12571008 の補助を受けた〉

NII-Electronic Library Service